

博物館だより



博物館休館日カレンダー
2026年 9月

日	月	火	水	木	金	土
30	31	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	1	2	3

休館日 ※情報はR8.8.15現在

No.238

令和8年9月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122番地13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667



○ 写真部分だけでは、切手としてご利用いただけません。
○ 郵便料金の支払のためにこの切手をご利用の場合、写真部分に消印がかかることがあります。

▲みやこ町先人フレーム切手(見本)

昭和100周年記念 みやこ町制20周年記念 「オリジナル先人フレーム切手」絶賛発売中!

みやこ町は古墳や国分寺跡など重要な遺跡がみられる町ですが、吉田増蔵をはじめ、様々な分野で活躍した先人を多く輩出した町としても知られています。
本年が「昭和100周年」及び「みやこ町制20周年」にあたることを記念して、特に大きな足跡を残したみやこ町ゆかりの先人10名を対象に、「みやこ町オリジナル先人フレーム切手」を製作しました。
このフレーム切手は、先人の肖像がそれぞれシールタイプの切手と



なっているものです。
1シート1800円で「みやこ町歴史民俗博物館」及び本庁(勝山)住民課窓口で、購入できます。
*郵便局では購入ができません。

切手の対象人物

吉田増蔵…元号「昭和」考案者
吉田健作…日本近代製麻業の父
小宮豊隆…夏目漱石門下のドイツ文学者
岩垂邦彦…「NEC」の創業者
堺利彦…日本社会主義運動の父
松室致…法律家・初代政法大学学長
鶴田知也…芥川賞作家
葉山嘉樹…プロレタリア作家
中村春堂…かな書道の名手
吉原古城…神道家・書家・漢学者

7月の業務日誌から

7月25日(土)「みやこ学講座」で、絹織物の歴史・文化の研究者、林久美子氏による「絹の歴史とみやこ町」の講演及び実演を開催しました。講演では絹の歴史についての概説やみやこ町の意外な関わりについて話していただきました。また実際に使われてきた道具を使って繭から糸にする作業の実演では減多にみる事ができない作業風景に受講生の皆さんは興味津々で、様々な質問や驚きの声で溢れました。



▲繭から糸を繰り取ったあとのサナギ。美しい絹糸を作る過程を詳しく学ぶことができました。

◆9月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
9月5日(土) 9時30分〜
【古文書講座】
9月19日(土) 13時30分〜
【古典かな講座】
9月19日(土) 9時30分〜
【みやこ学講座】
9月26日(土) 10時〜
※日程等変更となる場合があります。

みやこの歴史発見伝

190

よみがえる「みやこの曼荼羅」Ⅰ

「豊前国分寺所蔵「胎藏界曼荼羅」「賢劫千仏図」」

不安な時代が生んだ芸術「仏画」

令和も既に8年目を迎えました。コロナ騒動に始まったこの時代もようやく落ち着いてきたかと思えば、地震や猛暑といった自然災害に加えて、世界各地で戦火が広がる中、AIの進化に伴う危うさなど、時代の激変への不安はまだまだ解消されそうにありません。

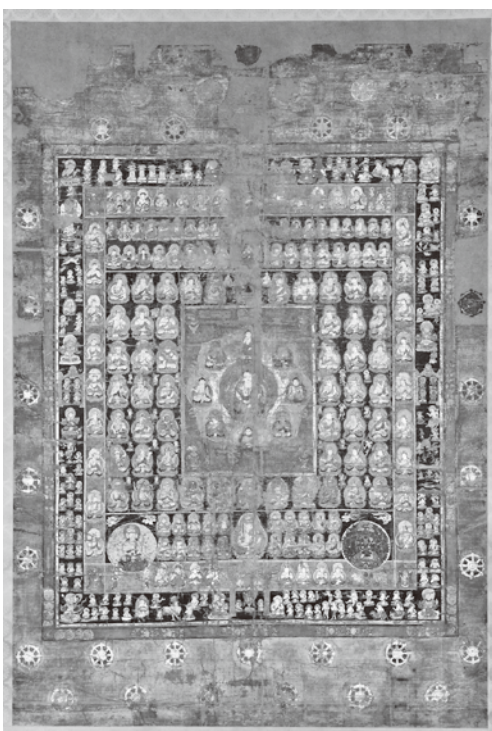
いつの時代でも人々が求めるのは心の平安を約束する存在です。日本では大きな時代変化のたびに「新宗教」が興り、今なおその命脈を保つものが少なくありません。その代表的なものの一つに密教や浄土教があります。

前者は密儀を介して即身成佛^{そくしんじょうぶつ}をめざし、後者は阿弥陀如来への帰依によって後生の安楽を得ることを本義としています。いずれの教えも、教義の理解を促すため荘厳な仏画を描くことで知られます。どちらの教えも古くから全国に広まって、みやこ町内のお寺にも貴重な仏画が遺されています。

豊前国分寺に伝わる二幅の仏画

豊前国分寺（以下単に国分寺）は奈良時代に創建され、現在に至るまで千年以上にわたって法灯を護り続ける古刹^{こしかつ}です。

国家の平安を祈ることを課せられた寺院であるがゆえに、そのための法要に用いられた仏画や調度は数多かつたと思われます。しかし度重なる天災や戦乱のため、その多くは失われてしまいました。奇跡的に残された二幅の仏画が伝わります。一つが「胎藏界曼荼羅」、もう



▲ 国分寺所蔵 胎藏界曼荼羅 (写真提供 国分寺)
平成22・23年度に2年に亘る大修理が行われた

一つが「賢劫千仏図」と呼ばれる仏画で、いづれも14世紀半ばから15世紀にかけての製作と見られています。それぞれに注目すべき特徴が見られます。

●胎藏界曼荼羅

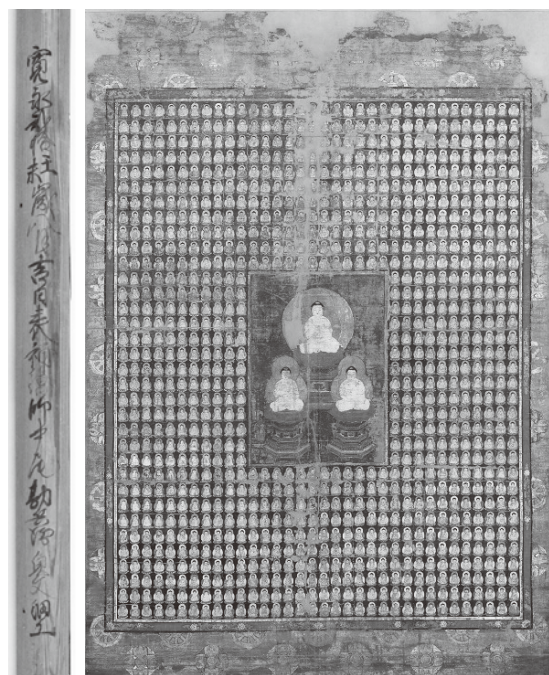
曼荼羅は密教に特有の仏画で、その世界観を絵や図像で示すことから「見るお経」とも呼ばれます。とりわけ空海が始祖となった真言密教では、その図柄は空海が唐から持ち帰った曼荼羅を厳密に踏襲することが求められます。

しかし国分寺の曼荼羅にはそれが見られないこと、地理的に天台密教を奉じた英彦山や宇佐・国東に近く、その影響下にあった歴史からみて、この曼荼羅は天台密教系曼荼羅とみられています。この種の曼荼羅は県下唯一の貴重な存在と評価されています。

●賢劫千仏図

千仏図は平安時代以降に盛んとなった仏名会^{ぶつみやうえ}とよばれる懺悔^{ざんげ}滅罪^{めつざい}を祈る法要で用いられる仏画で、本来は三世諸仏（過去・現在・未来に千体ずつ表れる三千の仏）を供養するため一幅に千体仏を描いた画幅三幅がセットとなっています。国分寺の千仏図も元来は三幅あったのでしようが、混乱の中で失われ、現在は現世の千体仏を描く賢劫千仏図のみが伝えられています。

ちなみに千仏図は供養すべき諸仏の羅列に過ぎず、曼陀羅とは区別される存在ともいわれます。ただ広い意味で仏教の世界観を示すことは共通していることから曼荼羅系仏画とされます。この千仏図は胎藏界曼荼羅と



▲ 国分寺所蔵 賢劫千仏図 (写真提供 国分寺)
左は令和2・3年度に2年に亘る大修理が行われた際に発見された、軸木に記された紀年(寛永2[1625])と表具師の名前

ほぼ同時期に作られたものと考えられています。しかも製作は緻密な画風や料絹（画材）が大部となる構造から、京都やその近辺で製作されたものとみられています。こうして数々の災難を乗り越えて伝来した二つの曼荼羅ですが、江戸時代初めに、大規模な修理が必要な状態に陥ります。幸いに小倉藩主・小笠原忠真の寄進により、京都の三流表具師・中尾勘兵衛^{なかお かんべゑ}の手により入念な修復が施されました。約四百年後、再び大修理が行われた二つの曼荼羅はまた輝きを取り戻しましたが、その陰には、百年単位で未来を見越して行われる修復術「装潢修理技術^{そうわうしゆりぎじゆつ}」の存在があります。次号では、そのことをもう少し詳しくお話します。

(木村達美)